
絵に込められたもの

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

絵に込められたもの

【Nコード】

N1887F

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

画廊であまりにも異様な絵に出会った。そこで老人から聞いた話は。絵を題材としたホラーです。

第一章

絵に込められたもの

古い絵だった。しかし何かを感じさせる絵だった。

「変わった絵ですね」

僕は画廊でその絵をはじめて見た時その絵の所有者の老人に対して月並みな言葉を述べた。この時は本当にそれだけだった。

「何か。見ていると」

「どう思われますか？」

「怖いですね」

また月並みな言葉を述べたのだった。その絵はやたらと筋が目立ち人であるがそれは病的なまでに痩せていて目は赤く濁りそれでいて薄気味の悪い光を放っていた。それでいて口元は笑っていた。しかしその笑みはただ両端が歪んだだけであり表情はない。妖怪のものではないかとさえ思える不気味な絵であった。

「ムンクに似ていますがまた違いますね」

「ムンクですか」

「はい」

こうも述べたのだった。

「そんな感じじゃないですかね、この絵は」

「確かにそれはありますね」

老人もそれは認めたのだった。

「ですが。この絵はそれだけではないのですよ」

「それだけではないと」

「そうです」

老人は陰気な顔で答えてきた。僕の側で沈みかつ恐ろしいものを見た後の顔で答えたのである。

「実はですね。この絵を描いた画家はこの世にはいません」

「この世にはいないと」

「そうです。亡くなりました」

彼は僕にこのことを語ってくれた。

「もう何年も前に」

「そうでしたか」

「田山洋一郎」

ここで僕にも聞き覚えのある名前が出て来た。

「御存知でしょうか。この名前を」

「田山洋一郎ですか」

「御存知ですね」

「一応は」

答えはしたが頭の中で戸惑いを覚えた。何故ならその田山という画家の絵は今僕が目の前で見ているものとは全く違ったものだったからだ。

彼の絵は幻想的でかつ美しいものだった。どちらかといえばルネⅡマグリットのそれを思わせるシュールリアリズムであった。しかし今日の前にあるこの絵は。シュールリアリズムであろうがそこにあるのはまるで人の心の裏側を見せているような恐ろしいものであった。

「ですがこの絵は」

「話すと長くなります」

老人は俯いたまままた僕に述べてきた。

「それでも宜しいでしょうか」

「ええ」

僕は答えた。そこには僕の意志はなく引き込まれるような感じだった。

「是非。何故こんな絵を描いたのか」

「わかりました。それではこちらへ」

ここで画廊の隅に案内された。見ればそこは喫茶場になっていた。幸い画廊には僕と老人以外は誰もおらず話すには充分だった。

「どうぞ」

「ええ。それでは」

「紅茶がいいですか。コーヒーですか」

「コーヒーを」

何気なくコーヒーを頼んだ。

「それを御願います」

「わかりました。それではウィンナーはどうでしょうか」

「あっ、いいですね」

ウィンナーコーヒーは僕の大好物だ。だからそれに乗った。

「では御言葉に甘えまして」

「コーヒーはやはりウィンナーですよ」

老人は笑顔でコーヒーについて述べてくれた。席に座り届いたコーヒーは二つ共ウィンナーだった。どうやらこの人もまたこのコーヒーが好きらしい。

「さあ、どうぞ」

「有り難うございます」

コーヒーのそのかぐわしい香りが辺りを支配する。コーヒーの上に渦を巻いて奇麗に置かれた白クリームを最初に口の中に含みその甘さを楽しみながら残ったクリームをコーヒーの中に浸してかき混ぜる。するとコーヒーの黒が瞬く間にブラウンになっていくのだった。

そのブラウンは老人のものも同じだった。見れば同じ食べ方だった。

「同じですね」

「ええ」

お互い笑みを浮かべ合って言い合った。

「やはりウィンナーはこうして飲むものですね」

「はい。まずクリームを食べてからコーヒーを飲み」

「ですね。それからです」

「ええ。それで」

ここで僕は話を切り出した。話は決まっていた。

「あの絵のことですが」

「それですか」

「そうです。何があったのですか？」

話が出て強張った彼に対してあらためて問うた。

「あの絵に。何が」

「実はですね」

老人は僕の言葉を受けて静かに口を開きだした。

「私は。彼の友人でした」

「田山洋一郎ですね」

「はい、そうです」

僕の問いにも答えてくれた。

「学生時代の。大学からの知り合いでして」

「大学からのですか」

「芸術大学の同期でした」

思わぬ関係だった。田山が芸術大学出身で学生時代から素晴らしい才能を見せていたことは知っていたがこの老人がその彼と友人だったのは本当に意外だった。

「親友といってもいい関係でした」

「それだけの関係でしたか」

「その親友が見たことです」

語る老人の顔が真摯なものになった。

「それを今からお話させて頂きます」

「はい」

老人のその言葉に頷いた。こうして僕は老人の話聞きはじめた。それは実に恐ろしくかつ陰惨な話だった。この世にあった話とはとても思えないまでの。

第二章

田山は大学にいた頃から素晴らしい画家として知られていた。彼の友人である老人、名前は杉原御舟といった。彼は実家の画廊の経営を継いでその職から彼の助けとなっていた。二人の仲は親密なものでかなりいいものだった。お互い家庭も設け家族ぐるみの付き合いにもなった。しかしそれが急に終わったのだった。

それは突然のことだった。田山が杉原との話を終えて己の仕事場でもある自宅に帰ってみるとそこにあったのは。無残に殺され鮮血の中に横たわっている彼の家族がいたのだ。

これは忽ちのうちに大騒ぎとなり杉原も血相を変えて田山のもとに来了。彼はもう息をしていない家族を見下ろしたまま呆然としていたのだった。時折後ろにある大きな鏡をちらりと見ながら。

「田山・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

田山は彼の声に応えなかった。応えられなかったと言わなければならない。何が起ったのか把握できなかった。把握したくなかったと言い換えられるか。少なくとも彼は今完全に心を失ってしまった。そうならざるを得ない状況になってしまっていたのだ。

数日間取調べが続いた。犯人についてもそれは行われたがそれは難航しとても見つけられそうになかった。知人が徹底的に調べられたがそれでもだった。犯人が誰で何の目的の為に彼の家族を殺したのか。それが全くわからなかったのだ。

杉原は呆然としたままの田山を何とか必死に慰めた。これは友情から来るものだった。しかし犯人は見つからずその慰めは無駄なものになるうとしていた。しかしある時不意に。茫然自失のままで抜け殻になっていた彼が突如として動き出したのであった。

「!? どうしたんだ」

「許さん」

虚ろな顔であったが彼は確かに言ったという。

「許さん。あの女」

「あの女!？」

「そうだ、あの女だ」

彼は言うのだった。

「あの女、許さん」

「あの女!？ 誰なんだそれは」

「私にはわかる」

彼は何時の間にかキャンバスの前に立っていた。家族を殺されてからずっと筆を持たなかった彼が突然だった。そして描きはじめた絵は。

「何っ、その絵は」

「あいつだ」

田山は驚く杉原をよそに描いていた。だがその絵は彼が知る田山の絵ではなかったのだ。

幻想的な、あまりに幻想的でまるで美しい夢の世界の様な普段の彼の絵ではなかった。人物画だったが縦に線が無数に入りそして顔は醜く歪みまるで妖怪の様だった。首も何もかもが不自然な程に曲がっており人間とは思えない程だった。少なくともそれは彼が普段描いている絵とは全く違ったものだった。

「それは人間を描いているのかい？」

「そうだ」

田山の顔が変わっていた。その絵を描いているうちに虚ろだった目が血走り顔全体も幽鬼の様になり果ててしまっていた。痩せこけ、目だけが爛々と輝いていたのだ。

「人間だ。あいつだ」

「あいつ？」

「だから私にはわかるのだ」

声もまた幽鬼のそれを思わせる恐ろしいものになってしまっていた。

「あいつが殺した。私の家族を」

「あいつとは一体」

「今描いている」

描きながらの返答であった。

「この女だ」

「これは女だったのか」

「そうだ」

田山はじつと今自分が描いている絵を見据えながら杉原に答えたという。描いている間一度も彼の方を振り向くことなく。ただただ描いていたという。

「この女が妻も子供達も殺した」

「まさか」

「いや、わかる」

血走った声での返事だったという。

「わかる。だから描くのだ」

「一体何だというのだ」

杉原は何故それがわかるのか全く理解できなかったらしい。そしてそれ以上に田山が恐ろしかったという。完全に何かに取り憑かれ恐ろしい絵を描き続ける彼が。恐ろしくて何も言えなかったという。

第三章

絵が完成したのは早かった。何故なら田山は不眠不休で描いたからだ。その間碌に何も食わず描き続けたという。完成した絵は画廊を経営している杉原でさえ見たことのないような恐ろしい絵であった。

「完成したな」

「この絵を頼む」

描き終えた田山は痩せこけ目だけが異様に飛び出た顔で彼に絵を託したという。

「君の画廊に飾ってくれ」

「私の画廊にか」

「頼む」

一言だったという。

「それだけが頼みだ。今は」

「この絵を。飾るだけでいいのか」

「そう。それだけでいい」

やはりここでも取り憑かれたような言葉だったという。

「それだけで済む。だから」

「それだけで済む」

この言葉の意味も全くわからなかったという。だが彼は答えたのだった。他ならぬ親友の頼みということもあったがそれ異常に断ることのできない恐ろしいものを感じていたからだ。

「それだけでか」

「いいな」

地の底から響き渡るような言葉だったと聞いた。

「では頼むぞ」

「ああ、わかった」

「そうすれば全てが終わる」

その地の底から響き渡るような声がまた聴こえたときは心の奥底からぞっとした。彼は僕にもこう語った。僕もこのことははっきりと覚えている。

「全てがな」

「全てが」

「そうだ」

ここでぞっとする笑みを浮かべたという。彼が今まで浮かべたことなどない。

「それで終わるんだ」

「何はともあれ終わるんだな」

「ああ。終わる」

言葉が不気味に繰り返された。聞いているだけの僕にもそれが伝わった。

「それでな」

「わかった。じゃあ置こう」

杉原は静かに彼に対して頷いた。

「絵を。それでいいな」

「頼む。そうすれば後は思い残すことはない」

田山のこの言葉もまた非常に謎めいていたものだったという。少なくともそれは普通の人間の言葉ではなかった。こうして絵が画廊に飾られて数日経った時。画廊に一人の女がやって来たのだった。その女は。

「な・・・・・・」

杉原はその女の顔を見て思わず言葉を失った。何故なら。

「馬鹿な、そんな筈がない」

「来たか」

ずっと彼と共にいた田山は女の姿を認めてこう言ったという。

「遂にここに」

「遂に。じゃあ君はまさか」

「必ず来ると思っていた」

不思議な言葉だ。どうしてそう思えたのか全くわからない。しかし彼がここでこう言ったのは紛れもない事実だと。杉原は真剣な顔で僕に語った。

「ここに」

「あの女の顔は」

「見るんだ」

田山はまた言った。

「あの女は。絵に」

「絵に・・・・・・」

「近付いて来る」

彼の言葉に合わせるかのように女は絵に近付いた。すると女と絵がまるで鏡合わせの様になった。その瞬間だった。

「私が、私が・・・・・・」

女は絵を見て呻き声を出した。

「どうして私がここに」

「御前だ」

田山は異様に浮き出た目で呟いた。

「御前が家族を。私の家族を殺した。わかっている」

「私が私を見ている」

その時杉原は見た。何と絵が動いているのを。絵は自分と同じ顔を持っている女を見て笑っていた。不気味なまでに恐ろしい笑みを浮かべて立っていたという。

「あの時の様に」

「あの時の様に！？」

「鏡だ」

また田山は呟いた。

「鏡に残っていた御前の姿だ。私はそれを描いたのだ」

「馬鹿な、そんな筈がない」

杉原はすぐに彼の言葉を否定した。

「鏡に映っていたとしても。すぐに消える筈だというのに」

「私は見た」

田山の呟きは続く。

「御前の姿を。そしてわかっていたのだ、御前が何時何処に出て来るのか」

「そんな、こんな……」

「見ろ、己の顔を」

杉原は女を見つつ言った。

「己の醜い顔を。とくと見ろ」

「ああ、ああ……」

女は呻いたまま倒れた。そしてその場に倒れ込み動かなくなった。心臓が止まり息を引き取ってしまったのだ。絵は何時の間にか元の姿に戻り動かなくなっていた。だが女はこれで完全に息絶えてしまったことは事実でそれが変わることにはなかったのであった。

その後警察の取調べで女は指名手配中の連続殺人犯だとわかった。強盗だけでなく殺人に快楽を見出す所謂快楽殺人者だった。田山の家族はその快楽殺人者の犠牲となったのだった。そのことがわかったのは女が死んでからずっと後のことであつたのだった。

第四章

「……………ということですよ」

「そうだったのですか」

僕は老人の話を聞き終えてからまずは声をあげただけだった。

「それで。あの絵は」

「信じて頂けますか」

杉原さん、つまり老人は僕に声をかけてきた。

「この話。にわかには信じられないでしょうが」

「いえ」

僕は首を横に振って杉原さんに答えた。

「本当ならとても信じられませんがあの絵を見ては」

「信じて頂けるのですね」

「信じずにはいられません」

僕の返答はこうだった。

「あの絵にはそれだけのものがありますから」

「そうですか。ですから」

「はい」

杉原さんの言葉に対して頷いた。

「あの絵にはそれだけの恐ろしさがあります」

「確かに。あれは」

「恐ろしいのは絵そのものではありません」

杉原さんは言った。

「そこに描かれた心です。人を殺めて晒う女の心」

「はい、そして」

僕は杉原さんの言葉に続いた。

「それを描いた田山さんの心ですね」

「彼はね。優しい人でした」

少し俯いて僕に述べたのだった。

「とても。自分の家族をととても愛していて」

「その家族を失ってですか」

「そういうことになります。ですが」

杉原さんはここで首を傾げさせた。顔には疑問の色が浮かんでいた。

「どうしてあの絵が描けたのでしょうか」

「そのことですか」

「女の顔が鏡に映っていた」

これ自体が有り得ないことだった。

「どの家にも鏡はあります」

「はい」

これはわかる。鏡のない家なぞない。

「ですから女の姿が鏡に映っていたとしても不思議ではありません。ですが」

「何故それを田山さんが見たのか」

「鏡に映ったものは鏡の前から消えればすぐに消える」

これもまた摂理だった。常識の話だ。そう、常識のだ。

「それなのにどうして」

「怨念でしょうか」

僕は考えてからこう杉原さんに答えた。僕にはそうしか思えなかった。

「怨念ですか」

「ええ。御家族を何よりも大事にされていたのですよね」

「ええ」

これはもうわかっていた。

「その通りです」

「だからなのでしょうね」

僕はまた杉原さんに対して答えた。

「田山さんは鏡に映っていたものを見ることができたのです」
「そうですか」

「有り得ない話ですが」

僕はこう前置きせざるを得なかった。

「それでも。見られたのでしょうか」

「そうなのですか」

「怨みは深いです」

僕にもそれはわかった。

「家族を殺された怨みは。ですが」

「それによりあの絵が描かれ」

「はい」

ここでその絵を見た。呪われた、恐ろしい絵を。絵はまだそこにある。確かに。

「田山さんは御自身で怨みを晴らされたのです」

「御家族の怨みを」

「それはいいか悪いかはわかりませんがそれは確かです」

杉原さんに話しながらまた絵を見た。相変わらず不気味に笑っている。

「その女を。あの人が最も憎んでいた女の絵を描いて」

「ですね。確かに」

「それですね」

僕はここで話題を変えてきた。

「田山さんはもうお亡くなりになられていましたよね」

「ええ」

杉原さんは僕のこの問いに静かにこくりと頷いて答えてくれた。

「三年前に。癌でね」

「そうでしたね。もう三年になりますか」

「今では静かに過ごしていますよ」

「お墓にですか」

「家族と一緒に」

杉原さんはまた僕に答えてくれた。

第五章

「穏やかに過ごしていますよ」

「そうですか。それは何よりです」

「安らかな顔でした」

そう語る杉原さんの顔もまた非常に穏やかなものだった。その穏やかな顔で微笑んで僕に語ってくれていたのである。それを見て僕もまた穏やかな顔になっているのがわかった。

「怨みなぞ何処にもない顔でしたよ」

「絵もそうでしたね」

僕は今度は絵について言及した。ここであらためてコーヒーカップを右手に持った。コーヒーはもう冷めていたがそれでも香りはかぐわしいものだった。

「最後まで。美しい絵で」

「その時、その絵だけでした」

杉原さんはまた僕に語ってくれた。

「あの様なことになったのは」

「人は時として怨みに心を支配されますね」

僕はその杉原さんにこう述べた。

「様々な事情により」

「ええ」

「ですがそれを消し去った時は本来の己に戻ることができます」

「確かに。彼もそうでしたし」

「あの人は恨みを絵に込められました」

今ではそのことがはつきりとわかった。だからあの絵になったのだとも。

「そして怨みを果たされ」

「怨みを終えたというのですね」

「僕はそう考えます。それでよかったと思います」

「家族の無念を晴らしてですか」

「女の罪はおぞましいものです」

人を殺したというそのことがだ。それをおぞましいと言わずして何と言うのかとさえ思った。

「何時かは報いを受けるものでしたし」

「それは私も同じ考えです」

「あの方は御家族の無念も御自身の怨みも晴らされた」

僕は今度はこう延べさせてもらった。

「それでよかったのですよ」

「あの絵はだからこそ価値があるのですね」

「はい。そう思います」

僕はあらためて杉原さんに対して頷いてみせた。

「だからこそです」

「そう言って頂いて何よりです」

今度の杉原さんの言葉は少し妙に聞こえた。

「何よりとは？」

「私はあの絵をずっと疎ましいと思っていました」

「怨みの絵だからですか」

「はい。怨みを込めた絵だと思っていました」

聞いていてそれも無理のないことだと内心思った。確かにあの絵は怨みにより生み出された絵であるからだ。これは否定できない。

「ですがそれが晴らされたというのなら」

「それでいいのですか」

「今ここで貴方とお話してようやくそういう考えに至りました」

微笑みはさらにいいものになっていた。悟りきったような、清々しいものに。

「有り難うございます。これからあの絵を普通の気持ちで見ることが出来ます」

「そうですか」

「さて。それではですね」

杉原さんは僕に声をかけてきた。

「コーヒーのおかわりはどうですか」

「おかわりですか」

「貴方も私も飲み終えていますし」

「おや」

言われてカップを見る。見れば確かにもうカップにコーヒーはなかった。何時の間にか全部飲んでしまっていた。残っているのはカップに僅かにあるコーヒーの残り模様と微かな残り香。それだけであった。

「もう一杯如何でしょうか」

「宜しいですね」

「ここではコーヒーは無料です」

気前のいいことを言ってくれた。

「ですから。遠慮なさらずに」

「そうですか。宜しいですね」

「是非」

こうも言われて勧めてくれたのだった。

「お飲み下さい。またワインナーでしょうか」

「宜しければ」

本当にワインナーは好きだ。二杯もいただけるとは恐悦至極な程であった。

「御願います」

「はい、それでは」

「それですね」

今度は僕が話を変えてきた。今まさに立ち上がろうとしていた杉原さんに対して。杉原さんも動きを止めて僕に応じてくれたのだ。た。

「もう一つ御願いがあのですが」

「何でしょうか」

「田山さんの絵です」

僕が言ったのはこのことだった。

「宜しければもっと見て宜しいでしょうか」

「ええ、勿論ですよ」

その穏やかな笑みで僕に答えてくれた。

「是非共。それが私の仕事ですから」

「そうですか。それでは御言葉に甘えまして」

「さらに申し上げるなら」

今度は杉原さんの言葉の番だった。

「お買い頂ければ何よりです」

「残念、そこまで僕は裕福ではないので」

「お安くしますよ」

「いや、それでもです」

「まあそう仰らずに」

最後はにこやかに話が終わった。思えばまことに不思議な話だ。

しかし田山さんは絵により怨みを晴らした。そのことだけは決して忘れることができなかった。何時までも何時までも。

絵に込められたもの 完

2008・8・11

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1887f/>

絵に込められたもの

2010年10月8日15時36分発行